

## 長昌寺のさつきと砂盛り (山田)

山田というところに長昌寺ちやうしやうじがあります。今から三百年ほど前に建てられたお寺です。境内けいだいにはたくさんさつきの木が植えてあり、毎年きれいな花を咲かせます。また、本堂前には白い砂が両側に盛り上げてあり、そのまわりがなじきできれいな円が描かれています。

ある年、ことのほか花芽が多くついて、さつきが見事に咲きそろいました。そのことが評判になり、九鬼のお殿様の耳にも入ったそうです。

お殿様は一度見たいものと家臣に話され、香下寺かしたでら参拝の帰り道に立ち寄るということになりました。

先回り役が長昌寺に知らせてきました。

寺では、お殿様が突然にお立ち寄りになると聞いて、驚おどろくやら、とまどうやら。どのようにお受けしたらよいのか、それはそれは大変なことになりました。とにかく、粗相そそうのないようにしなければなりません。住職じゆうしやくは寺の総代さんと相談しました。

お殿様は、下の広い道でかごを降り、細い道を歩いてこられる。それに、庭も歩かれる。きれいな砂をまいてお迎えしようということになって、檀家だんかのみんなに手伝ってもらい、早速取りかかりました。

川から取ってきた白い砂をしきつめるようにまきました。余った砂を本堂の前に盛り上げたのです。

お殿さんの行列がやってきました。住職はお殿様をひとまず本堂へとご案内しました。

「ようこそお越しくございました。」

「この寺のさつきが見事に咲いているというので、参ったのじゃ。」

「それは、それは、ありがたい思おぼし召めしでございます。」

「ほう、本堂の前のさつきは、とりわけ見事に咲いているではないか。」

「はい、古株ふるかぶで、よく枝を張っております。今年はこのほか、よう花をつけました。」

「他のさつきより赤いし、それに花も大きいほう。」

「はい、大杯たいはいと呼んでおります。」

「そうか、名前の通りじゃ。見事、見事。」

お殿様は立ち上がって、縁側えんがわへいかれました。三メートル

ルもあろうか、大杯たいはいと呼ばれるさつきの枝という枝には花がぎっしりついています。それはそれは見応みこたえのある古木だったのです。ひとしきり眺ながめてから、今度は庭に出て見ていただくことになりました。

本堂の階段を下りて履き物をはき、ふと、目に止められたのが、砂盛りです。

「ほう、この砂で迎えてくれたのだな。」

「さようでございます。」

庭のさつきが白砂に映うつえていました。本堂の横から回って裏庭のさつきも見ていただきました。

「どれもよく咲きそろっているな。見事じゃ。」

「ありがとうございます。」

「きつとよく世話をしているのであろう。この砂にも心がゆきとどいておる。にわかなことで世話をかけたが、よいものを見せてもらった。」

とお殿さんは礼を言い、帰っていかれました。

住職はほつとするやら、ありがたいやら。心を尽くして協力してもらった檀家だんかの人たちに感謝しました。

この寺が「さつき寺」と呼ばれるようになったのは、このことがあってからなのです。

それから古木の大杯は、毎年たくさんの花を咲かせています。ある大雪の年、本堂の屋根から落ちる雪で枝が折れたので場所を移し、大切に世話をされています。

また、この寺では庭のそうじのおりには、砂を盛り上げ、周りにがんじきの跡目を入れておくようにしました。今ではどの人も大事にお迎えするという意味で、砂盛りを続けているのだそうです。

